目標解答時間 15分

＿＿＿月＿＿＿日

内容理解（中文） Comprehension (Mid-size passages)

次の(1)から(3)の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。

(1)

植物は動かない。この性質を「固着性」と言う。

（中略）

動物は敵が来れば逃げることができるが、植物は害虫がやってきても逃げることができない。また、動物は居心地が悪ければ、より適した生息（注1）場所を求めて移動することもできるが、植物はそこがどんな場所であっても、移動することはできない。

固着性のある植物は、そこに根を下ろしたら、その場所で生きるしかないのだ。

そんな植物の生き方は「変えられるものを変える」ことであると私は思う。「変えられるもの」とは何だろうか。残念ながら、植物に環境を変えるような力はない。そうだとすると変えられるものは「植物自身」である。

そのため、植物はさまざまな変化をする。この変化できる能力を「可塑性」という。植物は自在（注2）に変化する。人間は多少の違いはあっても、誰もが同じような形で同じような大きさをしている。これに対して、植物は形も大きさも自由自在である。同じ植物でも大きくなったり、小さかったりするし、縦に伸びたり、横に枝を伸ばしたり、形もさまざまである。そして、環境に合わせて自分を変化させるのである。

「固着性」と「可塑性」が植物の生き方なのだ。

私たち人間は、動物だから自由に動くことができる。しかし、どうだろう。現代社会を生きる私たちは、野生動物のように自由に環境は選べない。動けない不自由さを感じることも多いだろう。

植物は動けないから、逃げることなく環境を受け入れて、自分自身を変えている。そんな植物の生き方は、現代社会を生きる私たちには、参考にすべきところもあるのかも知れない。

（稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』筑摩書房による）

（注1） 生息：（主に動物が）生活すること
（注2） 自在に：自分の思い通りに

LIVEWORKSHEETS

1 筆者によると、植物とはどんな生き物か。

1 環境に影響を与える生き物

2 環境にいい影響を与えない生き物

3 環境からの影響を受ける生き物

4 環境からの影響を一切受けない生き物

2 この文章で言う「固着性」と「可塑性」の説明として正しいものはどれか。

1 固着性とは自分の形を変えないことを言い、可塑性とは自分の居場所を転々とすることを言う。

2 固着性とは自分の形を変えないことを言い、可塑性とは自分の形を変えることを言う。

3 固着性とは自分の居場所を変えないことを言い、可塑性とは自分の居場所を転々とすることを言う。

4 固着性とは自分の居場所を変えないことを言い、可塑性とは自分の形を変えることを言う。

3 この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1 完全には自由に動けない人間にとって、植物の生き方には見習うべきところがある。

2 植物と違って動ける人間は、自分に合う環境を求めて常に移動すべきである。

3 植物が自分の形を自由に変えるように、人間も自由に自分を表現すべきだ。

4 植物に様々な形があるように、人間も一人一人が違うことを認めるのが大切だ。

LIVEWORKSHEETS

(2)

本を読んでもその内容をすぐに忘れてしまう。そんな経験は、おそらく誰(だれ)にでもあるのではないか。(中略)

私が効果的だと思うやり方は、本を読んだらとにかく人にすぐその内容を話すということだ。読んだ直後や読んでいる最中ならば、何とか話の内容は覚えている。知識がまだホットなときに、人に話してしまうのだ。時間が経てば経つほど記憶(きおく)は薄れていく。読んだらすぐに人に話すようにすれば、記憶(きおく)は定着しやすい。(中略)

相手がその本を読んだことがある必要はない。その本の内容に関心を持っている必要さえない。自分がその本の主旨(しゅし)(注1)を話して、その本の魅力(みりょく)を具体的に語ることができればいいのだ。話のあらすじや主旨(しゅし)を語ることはもちろん大切だが、それに加えて重要なのは、短くてもいいから具体的な言葉を引用しながら話すことだ。ほんの一言でもいいから、著者自身の言葉が話の中に盛(も)り込まれるだけで、格段(かくだん)(注2)に話は厚みを増し、しかも生き生きとしてくる。

一文だけでもいい。心に強く印象に残った文章を暗記しておいて、人に話しまくるのだ。はじめは本を見て話してもいい。何度か話しているうちに覚えてしまうだろう。本の話をいきなり一方的にされても受け入れてくれる程度の友だちがいることが、このやり方の場合必要となる。お互いにごく自然に、読んだ本の話をしあって、記憶(きおく)しやすくしておくような関係は、友人と呼ぶにふさわしい関係だ。

(齋藤孝『読書力』岩波書店による)

(注1) 主旨：文章や話の中心となる部分
(注2) 格段に：さらにもっと
(注3) 話しまくる：盛んに話す。休みなく話す

LIVEWORKSHEETS

1 筆者によると、本の内容を忘れないために有効な方法はどれか。

1 内容が伝わるかどうかはともかく、読んだことがない人に話す。

2 相手が読んだことがあるかどうかにかかわらず、本の内容を人に話す。

3 周りに人がいるかどうか気にせず、暗記した文を声に出して言う。

4 本を読んでいない人に内容が伝わるように、読んで聞かせる。

2 本の内容を人に伝えるときに重要なことは何か。

1 本に書かれている言葉や文章をそのまま取り入れること

2 話の中心となる部分を長くなってもいいから具体的にまとめること

3 本のままでなく自分の言葉に置き換えること

4 内容を正しく伝えられるように、本を見ながら話すこと

3 この文章で筆者が最も伝えようとしていることは何か。

1 本の内容を伝える方法

2 本の内容を覚えておく方法

3 いい友だちを見分ける方法

4 いい本と出会う方法

LIVEWORKSHEETS

(3)

人間には白目がありますが、類人猿(注1)にはありません。サルにも白目はありません。霊長類(注2)の中で唯一、人間だけが白目を持っています。白目というのは、実は感情表現において重要な役割を果たしています。人間は白目の動きを通して、相手の心の動きをつかむのです。黒目ばかりの瞳だと何を考えているのかわからないのですが、白目があると表情が出るのです。

目は、本来急所(注3)で隠したい部分なので、ほかの霊長類には白目がありません。カモフラージュ(注4)するためです。白目があると、視線がどちらを向いているのかもわかってしまうので、行動が読めてしまいます。これはコミュニケーションには有効なのですが、捕食者(注5)に対峙(注6)するときには大変なデメリットです。

人類は進化の過程で道具を使用するなどしてほかの動物の脅威(注7)から身を守る術を得ましたから、白目のデメリットが低下しました。視線をカモフラージュするよりも、白目を活用した視線によるコミュニケーション能力を進化させたのです。白目があれば、その人が何を今見ていて、何を考えているかを集団内で理解し合い、共有できるからです。

白目を活用するコミュニケーションには相手との程よい距離が必要です。あまり顔を近づけすぎると、逆にわからなくなってしまうんですね。だから人間はゴリラほど顔を寄せ合わずに対面するのです。

(山極寿一『「サル化」する人間社会』集英社インターナショナルによる)

(注1) 類人猿：ゴリラなどのサルの仲間。ヒトに近い動物
(注2) 霊長類：ヒトも含むサルの仲間
(注3) 急所：体の中で生命にかかわる大事な所
(注4) カモフラージュ：敵に見つからないようにすること
(注5) 捕食者：生物をとらえて食べるもの
(注6) 対峙する：にらみ合い対立する
(注7) 脅威：脅かされ感じる恐ろしさ

LIVEWORKSHEETS

1 筆者によると、サルなどの動物に白目がないのはどうしてか。

1 コミュニケーションをとる必要がないため
2 敵(てき)に行動が読まれないようにするため
3 隠(かく)れている敵(てき)をいちはやく見つけるため
4 人間ほどの豊かな感情がないため

2 人間にとって白目のデメリットが低下したのはどうしてか。

1 コミュニケーション能力が発達したから
2 ほかの動物と違って食べられる危険がないから
3 道具を持つことによって自分を守る方法を得たから
4 体が進化してほかの動物を恐れる必要がなくなったから

3 この文章からわかることは何か。

1 人間が相手との距離(きょり)を取るのは、相手が何を考えているかを知るためである。
2 ゴリラは対面しなくても、相手から感情を読み取ったり共有したりできる。
3 人間以外のサルの仲間は、白目以外を使ってコミュニケーションをしている。
4 人間は進化の過程で白目を得たが、ほかのサルの仲間は進化の過程で白目を捨てた。

LIVEWORKSHEETS